

松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No.35

2023年4月発行

■ 出雲型子持壺のはなし

古墳時代中頃に朝鮮半島から日本に伝播した新技術のひとつに須恵器生産があります。須恵器は穴窯で高温で焼く焼き物で、堅牢で水を通さないという特徴があります。色調は灰色です。

須恵器は最初は高価な珍しい焼き物でしたが、大和政権の後押しもあり、各地に窯がつくられ全国に広がっていきました。

古墳に供えるものから日用食器までさまざまな形のものが作られ、なかにはいろいろな装飾がつけられたものもあります。

子持壺もその一つで、大きな壺の上半にいくつもの小さな壺をくっつけた形です。

その中で、出雲地方で流行する子持壺には他にない特徴があります。それは、子壺の底には穴があけられ、大きな親壺の方も底がない、つまり中に何も入れることができない容器なのです。子持壺はほとんどが古墳から見つかり、葬儀に使われたと考えられます。古墳によっては、子持壺を並べ立てた様子もわかっており、現代のお葬式の花輪のように並べられたのでしょうか。

この出雲型子持壺の中でも古い形態のものが、鹿島町北講武の講武向山古墳から見つかっています。講武向山古墳は古く開墾の際に削平されたと伝えられます。その時に出土した遺物は古墳の下方辺りにまとめられたといい、写真の出雲形子持壺の破片は何度かにわたって採集されています。

その後、子持壺のフタの破片が採集され、30年くらい前に採集されていた破片と接合し、フタも特異な形であることが明らかになりました。

出雲型子持壺はやがて出雲東部の首長墓に採用され、出雲地方全体に広がっていきます。

☆講武向山古墳の出雲型子持壺は現在展示中です。



講武向山古墳出土の出雲型子持壺とフタ

■ 特別展図録販売中

令和4年度の特別展「海をひらく—弥生・古墳時代の海民」の図録を好評販売中です。

交通の大動脈であった日本海を往来し、定住した人々の足跡をたどり、その後の出雲地方の弥生・古墳文化を再評価します。最新の成果を盛り込み、日本海沿いに点在する海村の存在を明らかにする一冊です。

一冊1000円で資料館窓口でお求めいただけます。

郵送をご希望の方は冊子代金に送料215円を加え、現金書留または為替でお送りください。



発行 令和5年4月 松江市立鹿島歴史民俗資料館

〒690-0803 松江市鹿島町名分1355-4 TEL/FAX 0852-82-2797 Email : k-rekimin@mable.ne.jp
https://www.city.matsue.lg.jp/kanko_bunka_sports/rekishi_bunkazai/shiryokan/9697.html